

“インフルエンザワクチン論争の終焉は？”

Efficacy and effectiveness of influenza vaccines: a systematic review and meta-analysis

【背景】小学校時代のいやな思いでの一つが、インフルエンザワクチン集団接種でしたが、このワクチンの是非について賛否両論、必ずしも科学的評価に耐えられない多くの野外試験や誤った解釈によるワクチン無効論も加わり、ワクチン摂取率が急激に低下、日本でもインフルエンザワクチン接種は任意となっています。このたび、ワクチンの有効性を、科学的に証明するために、5000 以上の研究の中から、選りすぐり 31 の研究のみに絞り、メタ解析が行われました。

【方法】5707 の無作為化比較研究、観察研究の中から、不活化ワクチン(TIV)、弱毒化生ワクチン(LAIV)を用いて、RT-PCR 法、ウイルス培養などで、ウイルスを直接証明した厳格な 31 の研究に絞りこみ、その有効率(efficacy)、実質有効性(effectiveness)についてメタ解析が行われました。

【結果】TIVの研究では、12 シーズン中、プール解析が可能な 8 シーズンの解析が行われ、18 歳から 65 歳対象の研究の efficacy は、59%でした。一方、LAIVでは、12 シーズン中、プール解析が可能な 9 シーズンの解析で、6 か月から 7 歳までの対象の研究の efficacy は、83%でした。しかし、高齢者の研究では efficacy 研究のクライテリアを満たす研究はありませんでした。Effectiveness は、9 研究、17 シーズンの季節性インフルエンザワクチンの中で、6 シーズンでその予防効果が証明され、H1N1 では 69%の effectiveness が示されました。

【結論】このように、当たり前のことのように、インフルエンザワクチンもシーズンによって、当たり外れがあるようで、ウイルスそのものの証明まで厳格におこなった研究の EBM となると、その有効性は思ったより低いというのが結論のようです。さらに、6 か月から 7 歳の小児に対する生ワクチンはかなり効いているようですが、高齢者のEBMでは該当研究がないようです。日本の高齢者にとっては、EBMもなんのその、ワクチンは冬を知らせる年中行事に近い気がいたしますが。。

(文責 阿比留)